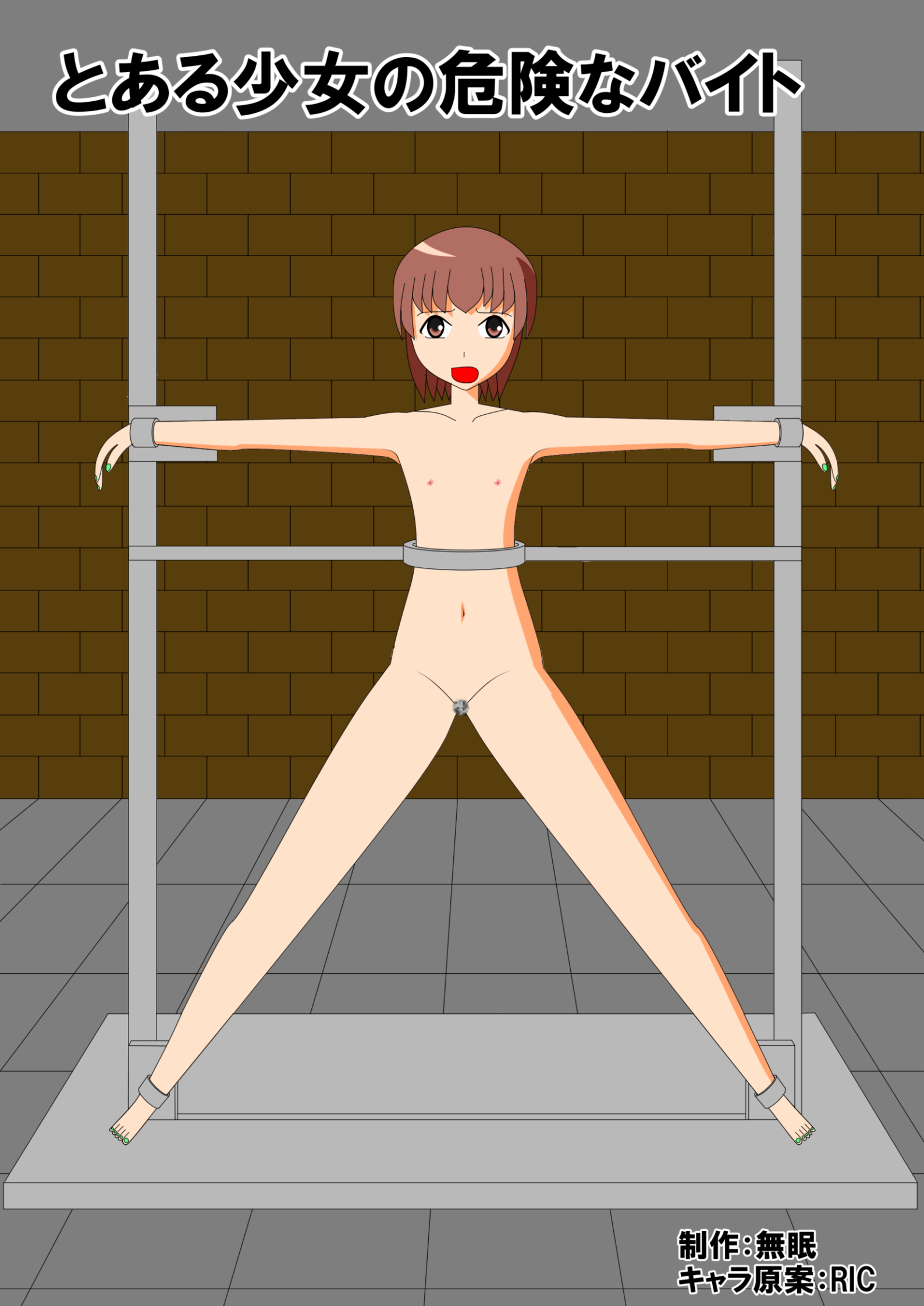
とある少女の危険なバイト



制作：無眠
キャラ原案：RIC

「な、何よ、これ！？」
　新村焔菜美（ほなみ）は目を覚ますと同時に、目を見張った。レンガ造りの壁とコンクリートの床の部屋で、焔菜美は手足を広げられた状態で裸で磔にされていた。
「手錠が……どうして……！　ヤダ、足も……！」
　困惑しながらも焔菜美は、意識を失う前に何があったかを思い出そうとしていた。すぐに、おぼろげながら意識を失う前の光景が脳裏によみがえってきた。
（バイトの面接に来てたら、いつの間にか意識を失って……）
　焔菜美はかろうじて動く頭で周りを見渡した。綺麗な腋や引き締まったウエスト、かわいらしいへそや脂ののった真っ白な腿はもとより、平坦な胸やまっさらな股間があらわになっているが、焔菜美が赤面するということはなかった。
「でも、なんであたし裸で磔に……」
　そこまで言ったとき、ドアが開いた。
「起きたようね」
　へそ出し丈のタンクトップにマイクロミニのショートパンツ姿の若い女が入ってきた。女の姿を見ると、焔菜美はまなじりを吊り上げた。
「放せ！　このっ！」
　焔菜美の叫びに女はひるむことなく笑みを浮かべた。
「それは無理よ。ちっぱいに綺麗な腋、引き締まったウエストにかわいらしいおへそ、むっちりとした腿。私好みだから、採用しちゃった♪」
　女の答えに一瞬驚いた焔菜美だったが、すぐに再び声を荒げた。
「何のバイトよ、これ！」
「あなたはね、調教のテスターよ。早速始めていくわ」
　笑みを浮かべたまま女は焔菜美へと向かって行った。

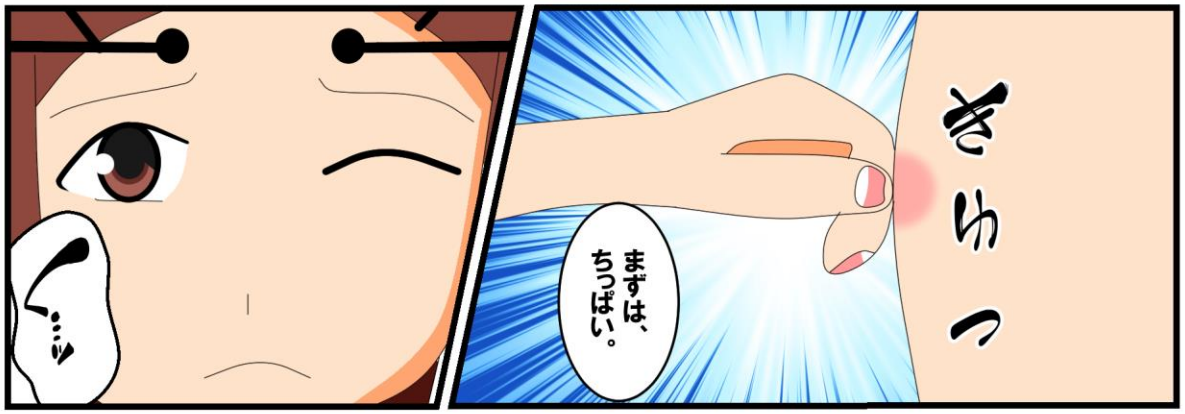
　焔菜美はじっと前を見つめていた。
「頭についてるの、何？」
　焔菜美に聞かれた女は焔菜美へと振り返った。
「センサーよ。これであなたの感度を計るわ」
　そういうと女は焔菜美に歩み寄った。

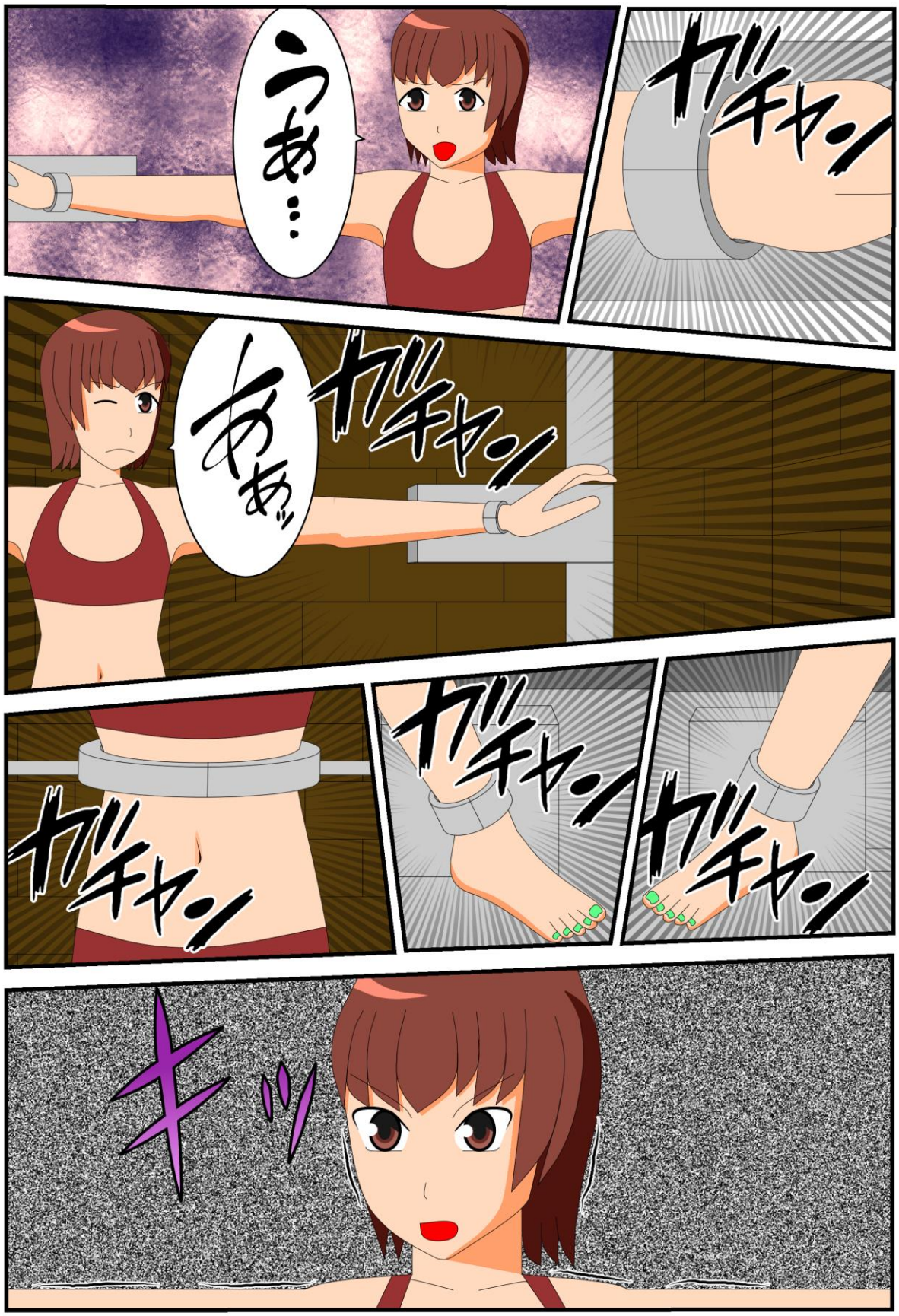
放せ！
このっ！
起きたかしら。
それは無理よ。

「まずは、ちっぱい」
女は焔菜美の平坦な胸へと手を伸ばし、まさぐり始めた。
「んっ……！」
焔菜美の口から嬌声が漏れた。
「腋」
「ふあ……」
続いて女は、焔菜美の腋をさすった。再び焔菜美から情けない声が漏れた。
「おへそ」
女は今度は焔菜美のへそに指を突っ込むと、指を動かした。
「ひっ！？」
焔菜美に言い表せないような快感が襲い掛かった。
「内腿」
さらに女は、焔菜美のむっちりとした内腿に手を這わせた。
「ひゃう！？」
女の手が軽く触れただけで、焔菜美は声を上げていた。
「いい声で鳴くわね……。それにしても、感じすぎない？」
笑みを浮かべた女に言われた焔菜美は、キッと女を睨んだ。
「まだ、触っただけよ。調教が始まったらどうするの？」
「うるさいっ……！」
焔菜美の声を無視した女は、焔菜美の股間へと手を伸ばした。
「次はここね」
「待って、そこは！」
女の意図に気づいた焔菜美は声をあげた。だが、女の手が止まることはなかった。
「待てないわ」
女の手が焔菜美のクリ●リスを摘んだ。
「あっ！」
焔菜美の全身に快感が走った。
「入るわね」
女は焔菜美の膣内に指を入れた。焔菜美に走っていた快感が一気に大きくなった。
「かき……回さないで」
精いっぱいの抵抗をした焔菜美だったが、女の手が止まることは

これであなたの感度を測るわ。

……

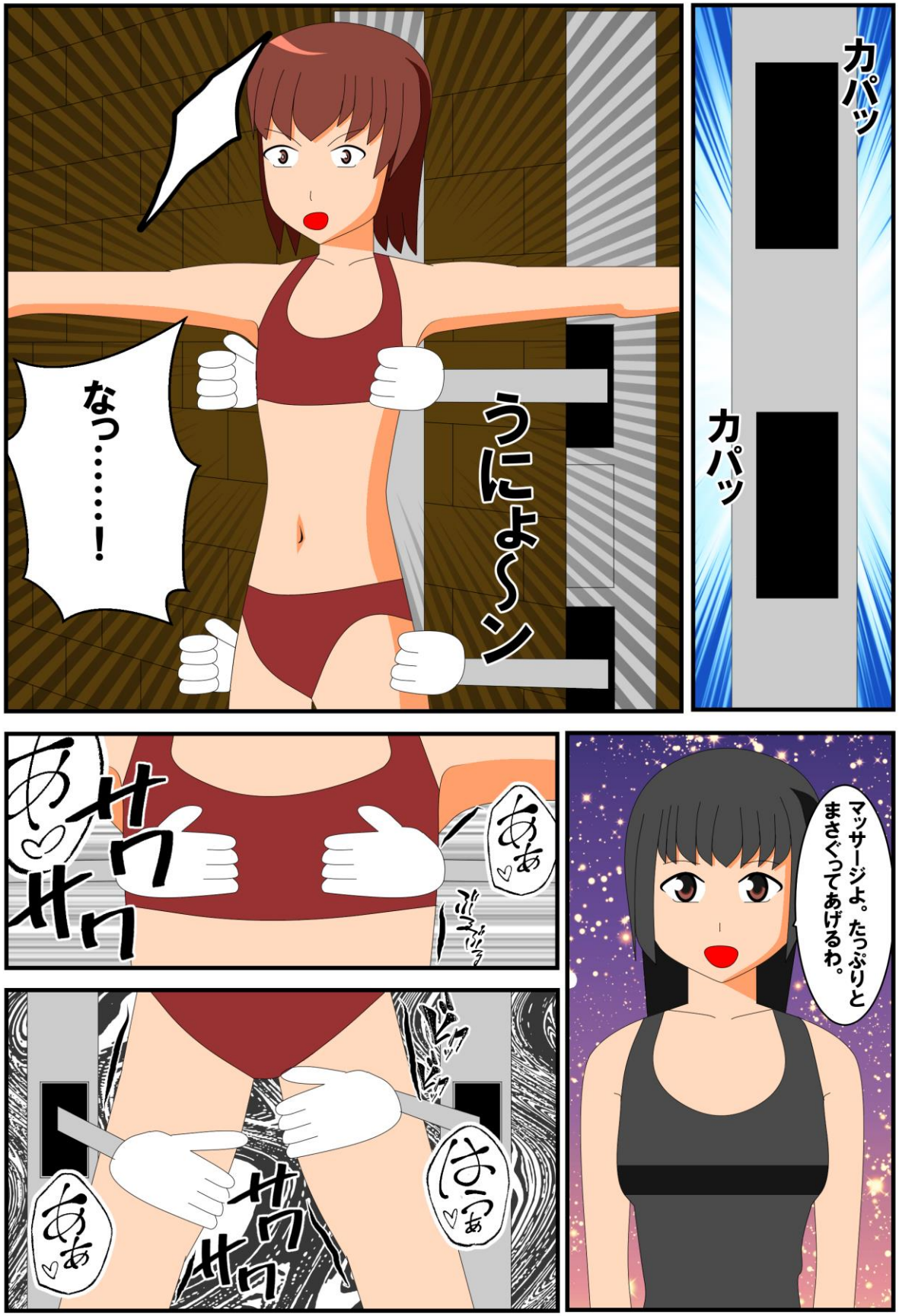



うぁ…
カチャン
あぁッ
カチャン
カチャン
カチャン
カチャン
キッ

なかった。
「検査は終了よ」
　女の声は、荒い息をついている焔菜美には聞こえていなかった。
「ゼイ……ゼイ……」
「聞こえてないかもしれないけどね」
　ぐったりとした焔菜美に抵抗する気力は残されていなかった。

　扉が開いた。臙脂色のレーシングトップとレーシングショーツに身を包んだ焔菜美が部屋へと入ってきた。
「拘束台で手足を広げて」
　女が焔菜美に言った。焔菜美は女を見ることなく拘束台へ裸足で歩み始めていた。拘束台にたどり着くと、焔菜美は両手両足を大きく広げた。
「じゃあ、止めていくわね」
　女の声に反応することなく焔菜美はじっとしていた。突如として、焔菜美の右手首に鋭い痛みが走った。焔菜美の右手首が金属製の分厚い枷で拘束されていた。焔菜美が右手首を見ると同時に、今度は同じ痛みが左手首に走った。さらに、右足首、左足首、腰が枷に拘束された。焔菜美は女をにらんだ。
「じゃあ、調教を始めていくわね。楽しんでいってね」
　楽しそうにしている女に、焔菜美は何も言い返せずにいた。

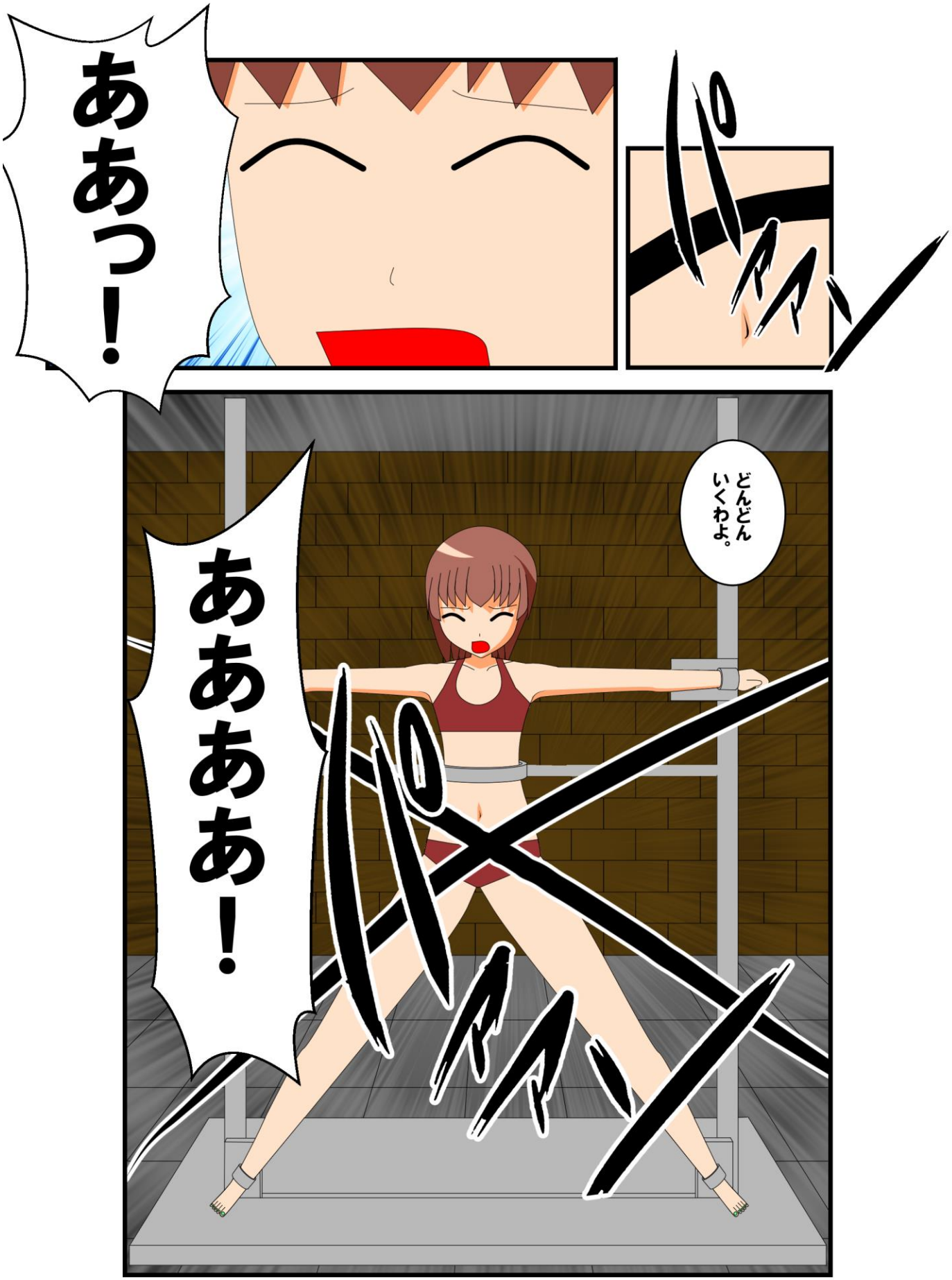
「何するのよ……！」
　焔菜美は声を絞り出すと女を睨んだ。
「まずはマッサージよ」
　女は手元のボタンを押した。拘束台の後ろに建てられていた柱の扉が開き、中からマジックハンドが現れた。
「！？」
　焔菜美は目を見張った。
「たっぷりとまさぐってあげる」
　女が言うのと同時に、マジックハンドが焔菜美の胸と内腿を撫で始めた。
「あん……ひゃんっ！」
　焔菜美の口から嬌声が漏れ始めた。


カパッ
カパッ
うにょ～ン
なっ……！
マッサージよ。たっぷりとまさぐってあげるわ。
ああ♡
サワサワ
あっ♡
ビクッビクッ
なっぁ♡
サワサワ
あぁ♡

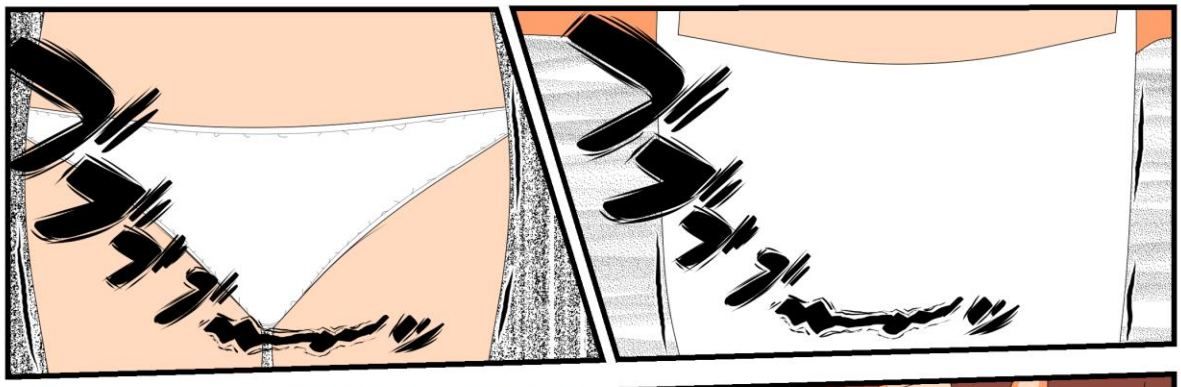
「我慢しなくていいわ」
　焔菜美の耳に、女の声が聞こえた。同時に、焔菜美の中で何かが崩れ始めた。
「気持ち……い」
　焔菜美の声が聞こえたのか、女は焔菜美に歩みよった。
「気に入ってくれたかしら。でもまだよ。ここと か……ここと か」
　女は焔菜美のわきや尻を撫でまわした。女に撫でまわされるたびに、焔菜美から情けない声が漏れた。
「敏感なあなたには、これでもきついでしょ？」
「んんっ！？」
　女が言い終わると同時に、焔菜美からひときわ大きな声が漏れた。女は目を見張った。
「イッちゃった？　マッサージでイッた人は初めてよ」
「ゼイ……ゼイ……」
　焔菜美は絶頂に達していた。荒い息をつく焔菜美を女は楽しそうに見つめていた。その間もマジックハンドは動きを止めることなく、胸を撫で、尻や腿をさすり、へそをこねくり回していた。
「でも、止めるつもりはないわ。たっぷりと楽しんでいってね」
　焔菜美は絶頂の余韻に浸る間もなく、再び嬌声をあげていた。

「ああっ！」
　部屋に焔菜美の声が響き渡った。女はちらりと手元の機械を見た。
「10回以上イッたわね。あなた、素質があるわ」
「ううっ……」
　呻き声をあげていた焔菜美だったが、女の声が聞こえたのか女へと視線を向けた。
「うるさいっ……！」
「次は何をしようかしら。楽しみにしていてね」
　焔菜美の声を無視した女は、楽しそうに焔菜美に言っていた。
「それより、へばっているけど大丈夫？」
　女に言われた焔菜美は顔を俯けた。
「まだ始まったばっかりよ」
　女の声は焔菜美に聞こえてはいなかった。ふと焔菜美は、うつむいた時女が何かを持っていることに気づいた。

「ねえ、それ、何？」
焔菜美に言われた女は、持っていた物を焔菜美へと掲げた。
「これはね、鞭よ」
焔菜美は目を見張った。
「今度はこれで、かわいがってあげるわね」
女は鞭を振りかぶった。
「ちょ、待って……！」
焔菜美の声は、振り下ろされた鞭の風を切る音によりかき消された。鞭は、焔菜美のむき出しになった腹に当たった。
「ああっ！？」
焔菜美の腹に激痛が走った。
「どんどん行くわよ」
女は続けざまに焔菜美に鞭を振るった。
「ああああああああ！」
焔菜美の叫びが部屋にこだました。
「うっ……ううっ……」
どれくらいたったのだろうか。女は鞭を振る手を止めた。
「いい顔になってきたわね」
女は部屋の片隅に立てかけられていた乗馬鞭を手にとった。
「今度はこれよ。これで背中やおしりをビシバシしてあげる」
「えっ……ウソ……でしょ……」
焔菜美は女が見せたものを見て、目を見張った。
「じゃあ行くわね」
女は乗馬鞭を振りかぶり、焔菜美の尻へと振り下ろした。
「うっ！？」
先ほどの鞭とは比べ物にならない痛みが焔菜美を襲った。
「このっ……！」
それでも反抗した焔菜美だったが、乗馬鞭が再び尻へ、背中へと振り下ろされた。
「ああっ！」
たまらず焔菜美は叫び声をあげた。
「ううっ……」
「まだまだよ。次はどんなお仕置きをしようかしら」
ぐったりしている焔菜美を女は楽しそうに眺めていた。

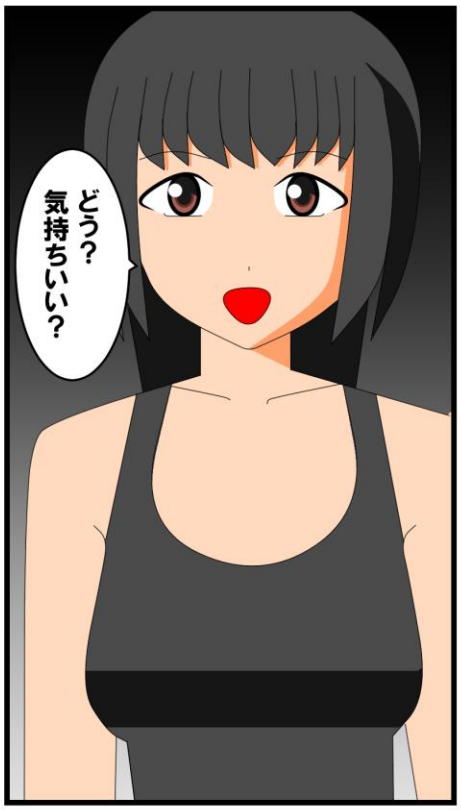
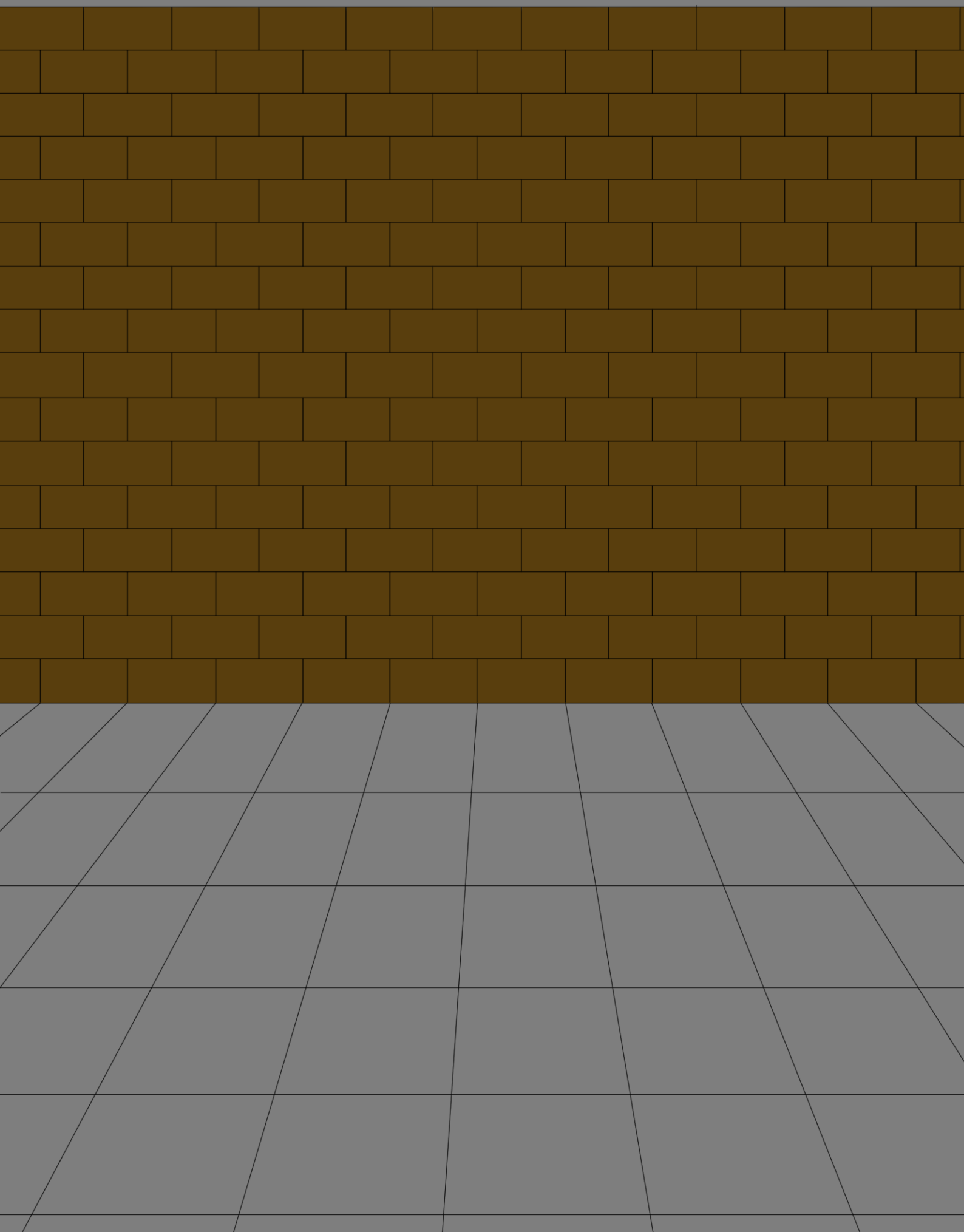

ああっ！
どんどんいくわよ。
あああああ！

焔菜美は、白い無地のショート丈キャミソールと白い無地のシンプルなショーツという格好で、十字に磔にされていた。先ほどまでとは違い、焔菜美の首には首輪が付けられていた。
「この首のやつ、何？」
焔菜美は不思議そうに女に尋ねていた。すぐに焔菜美の表情は、不安そうなものに変わった。
「これから何するの？」
「何って、気持ちのいいことよ」
そっけなく返した女は、手元の機械のスイッチのうちの1つを入れた。
「ひっ！」
直後、焔菜美の乳首とクリ●リスに振動が走った。
「何……これ……！　胸が……クリが……！」
焔菜美は目を見張った。
「ああっ、いいっ、いいよぉ……」
初めのうちは驚いていた焔菜美だったが、すぐに焔菜美は快楽へと身をゆだねていた。
「気持ちよさそうね」
焔菜美の様子を見た女は笑みを浮かべた。
「もっと気持ちよくしてあげる」
女はダイヤルを限界まで回した。焔菜美の乳首とクリ●リスにつけられたローターの音が大きくなった。
「きゃあああ！」
焔菜美の絶叫が響き渡った。
「どう？　気持ちいい？」
女の声は、焔菜美に全く聞こえていなかった。
「ああ！　やああ！　んんっ！？」
ローターが強まってしばらくすると、焔菜美は絶頂に達した。尤も、絶頂になったところでローターが止まるということはなかった。
「イッたばかり！　イッたばかりだから！」
「駄目よ、2時間は頑張ってもらうわ」
焔菜美の抗議を女は、平然としながら無視していた。ローターの音と焔菜美の叫びは、部屋に響き続けていた。


ブブブブブブブブブブ
ブブブブブブブブブブ

きゃあああ！

ビクビクッ!!
ビビビビビビッ
ビビビビビビッ
ビビビビビビッ
ああっ！
やああぁっ！


どう？
気持ちいい？

女はローターのスイッチを止めた。
「うっ……ううっ……」
焔菜美はぐったりとしていた。
「イキすぎても気絶できないでしょ」
焔菜美は女に言われハッとなった。
「その首輪には、気絶防止の効果があるの。調教が終わるまでつけててあげるわね」
焔菜美にしてみれば、地獄ともいえる言葉を女は平然と言い放った。